

巻頭言

特 集

肺癌画像診断2005年—肺結節の良悪性鑑別の進歩

村山 貞之

Guest Editor

世紀末から現在2005年にかけての画像診断の進歩は目をみはるものがあったと思う。肺癌診療においても、画像診断の進歩が多大な影響を与えている。PET、MDCT、MRIといった、まさに断層映像機器の発達と肺癌の病理的な概念の進歩が相まって、10年前とは様変わりしている。今回の特集は肺癌画像診断の現況を、特に、肺癌の良悪性の鑑別に絞らせていただいて、我が国の胸部放射線診断に携わっていらっしゃる先生方の中でも、それぞれの領域でエキスパートの方々にお願いして、まとめたいただいた。

ちょっと前までは、炎症性変化と読影していたと思われる、CT上の小さなスリガラス陰影が、実は早期癌であったことが判明している。高分解能CTは肺結節の良悪性鑑別に非常に有用である。保険診療が認められたPETが普及し、肺癌の病期診断や肺結節の良悪性の鑑別に利用されてきている。CTガイド下肺生検は、ちょっと前まで、実はCT利用ブラインド肺生検であったものが、real timeで生検針をCTモニター画面で直視しながら生検ができるようになり、正診率の飛躍的向上が見られている。また、MRIでは、造影ダイナミック法を用いて肺結節の良悪性の鑑別、さらには悪性腫瘍の予後因子の発見がなされている。

これらの診断能の進歩は、肺癌CT検診という新たな展開を生むこととなり、現在、注目を浴びている。上記の質的診断法の進歩があるからこそ、CTにより小さい結節を見つけることに高い価値が見いだされるものと思う。20世紀末は、画像診断以外にもさまざまな医療技術、概念の進歩があったにも関わらず、国民の肺癌の死亡率の低下を引き出すところまでは到達できなかった。さらなる画像診断を含めた医療の進歩により、肺癌の予後が改善する日も近いと思われる。その黎明の時期・2005年の画像診断の現況を読者の先生方に把握していただくことを希望し、序文とさせていただいた。

(琉球大学医学部放射線医学分野教授)